ご挨拶

本年六月三十日付けで、山命に依り三条別院輪番と云う重責を拝受いたしました。諸役職方々、ご門徒有縁の方々に支えられ、此の重責を果たしてまいる覚悟です。なにとぞ、ご指導、ご支援くださいますようお願い申しあげます。

本年も三条別院お取り越し報恩講を執行いたします。事前の清掃、準備、お荘厳、当日の諸役をお力添えくださる皆さま、ご参勤、ご参詣の皆さまには、心からお礼を申しあげます。

新型コロナウイルス感染症防止のため、葬儀、法事、報恩講などの仏事さえも状況を見極めて慎重に執行せざるを得ない厳しい状況の中で迎える本年の報恩講は、参詣が叶わないご門徒も多くいらっしゃるでしょうから、昨年もご出講いただいた武田定光先生(東京都江東区)の、テーマ『報恩講』は『問恩講(もんおんこう)』なり」のお話を本誌に掲載し、お届けさせていただこうとするものです。ご門徒の皆さまにはご精読くださるようお願い申しあげますとともに、ご多忙の中を寄稿くださった武田先生にはお礼を申しあげます。

さて、昨年までは予想だにしなかった新型ウイルスの影響により、私たちはいつ、どこで、感染するかわからず、絶えず命が脅かされているように感じます。しかし、私たちはこの日々を生きなければなりません。

宗祖親鸞聖人のご一生を見てみますと、聖人の幼少のころは、源氏と平氏の戦いや、飢饉や伝染病、大地震などの災害が相次ぎ、当時の京都は死者があふれ、都には死臭が漂っていたそうです。そのような中、聖人は九歳の春、京都青蓮院において慈鎮(じちん)和尚(かしょう)のもとで出家得度されました。聖人がお寺に着いたのは夜中でしたので、和尚は「今日はもう遅いので明日、得度、剃髪いたしましょう。」と言われた時、聖人は「明日ありとおもうこころのあだ桜　夜半に嵐の吹かぬものかは」と和歌を詠まれたと伝えられています。ここには、人の命を桜の花にたとえ、「人の命には明日があると言えないので、今すぐ出家させてほしい。」という願いが込められています。

私たち(自己中心)はこの人生を満足し、思い通りに生きたいと願っています。それが叶わない時は虚しさを感じます。死は、人が虚しさに止まることを許さず、人の自己中心性を超えた真のいのちに目覚めよ、と問いかけてきます。

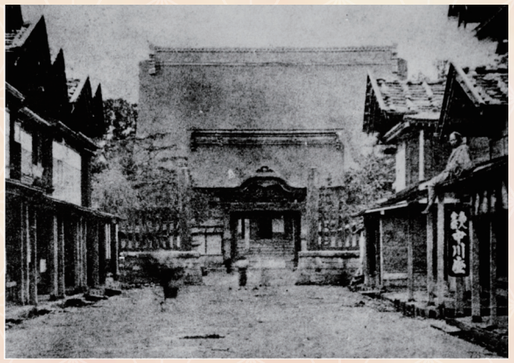
新型コロナウイルスの時代を生きるいま、聖人が求められた念仏を共に聞き、人生をいただく歩みの中で本当に大切なことは何であるのか、尋ねてまいりたく思います。

三条別院輪番　海岸秀道(かいがんひでみち)

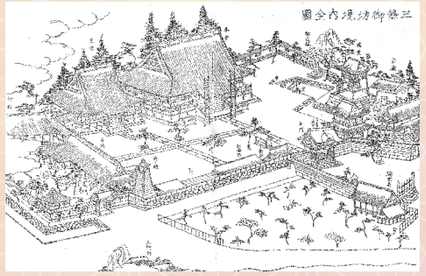
三条別院と報恩講

毎年、真宗本廟(本山東本願寺)では十一月二十一日から十一月二十八日まで御正忌報恩講が勤まります。三条別院では「お取り越し報恩講」と称して毎年十一月五日から十一月八日まで勤められています。

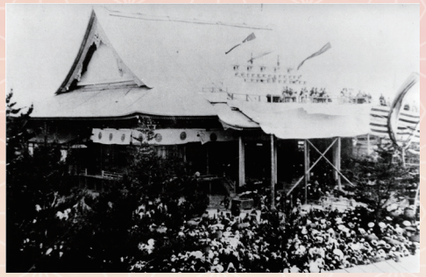
江戸時代後期の資料では「掛所(三条別院)の支配寺は三百余あり、門徒は貴賤、老若男女問わず群集し日々道路には人馬の往来が絶えない」(「三条市資料」上巻)という記述があるほど、三条別院周辺は賑わっていました。特に報恩講中の参詣者はおびただしい数にのぼり、当時の三条役所から「自らが生活できなくなるほどの寄進を取り締まるように」と言い渡されるほどでした。このことからも親鸞聖人の教えに生きる当時の熱心な門徒の姿が伺えます。



慶応3年 本寺小路より別院を望む



江戸時代の古地図の一部



明治39年 別院上棟式

また、大正期から昭和期の資料には、参詣者が遠方からも訪れ、参道である大町の表通りから本寺小路にかけては人が溢れるほどに三条の町が賑わう様子が記されています。お取り越し名物「植木市」市内各所で「菊花大展覧会・洋画展・拓本店」などが開催され、商店街では「お取り越し大売り出し」が行われ、大逮夜法要の様子はラジオ放送で街の人々に中継されるなど、三条の人々にとって「春は三条祭り、秋はお取り越し報恩講」と呼ばれるほど親しまれてきました。このように地域の人々の生活に密着し、今日までお念仏と共に受け継がれている歴史があります。

明治41年 別院参道 入仏式に10万人の参詣者